

Title	日系カナダ人一世・二世の日本語変種 : その実態と形成過程
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2016, 50, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70054
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日系カナダ人一世・二世の日本語変種

—その実態と形成過程—

渋谷 勝己

キーワード：日系カナダ人／コイナー／否定辞／音便形／アスペクト形式

1. はじめに

カナダには、明治以降、多くの日本人が移り住んだ。その結果、カナダには現在でも多くの日系人が暮らしており、その一部の人々は日本語を使用する能力をもっている。ただし、その日本語は、話者が英語とのバイリンガルであることから英語の影響を受け、また移り住んだ一世の出身地が多様であったこと、二世も日本語を習得するにあたってさまざまな独自の特徴を創り出していることなどの要因によって、特徴的な変種となっている。

このカナダの日本語変種を対象として、これまで、さまざまな研究が行われてきた。たとえば、彦坂（1995）は、バンクーバー郊外のスティーブストンに住む和歌山県日高郡三尾村出身の戦前一世を対象にインタビュー調査を行い、そのことばは、全体として、紀州弁の基礎のうえに共通語化がかぶさった日本語になっていると指摘した。そこに見られる紀州弁の形式には、以下のようなものがある：形容詞・ワ行五段動詞ウ音便形、サ行五段動詞イ音便形、二段活用形、否定形式ン・ナンダ・セイデモ、断定辞や、継続表現シモテイク、原因理由のサカイ、「居る」の意味のアル、アスペクト形式テアル、可能のヨウセン、モダリティ形式ネン、など。その他、子供（二世・三世）のことばにも、祖父母の方言が混じるとの指摘がある。また、日比谷・高木（2010）は、静岡県出身の、22歳で移住した一世（調査時80歳）の女性のインタビューデータのなかに、ワ行五段動詞ウ音便形（ただし促

音便形も併用) や、否定辞について五段動詞にン、一段動詞にナイを使用するという特徴などを見出している。日系カナダ人のことばについては、その他にも、その言語生活を郵送による調査票調査によって明らかにした彦坂(1994) や、二世の行うコードスイッチの実態を明らかにした Nishimura (1995)、一世が書き残した資料のなかの英語からの借用語を母音挿入という観点から分析した日比谷(2000) などの先行研究がある。

本稿は、これらの研究を承けつつ、戦前に移住した日系カナダ人一世がカナダで使用した日本語変種と、二世が継承した日本語変種にスポットライトを当てて、その実態を記述し、形成過程を考えるものである。具体的には、2節で日系カナダ人の歴史的背景を簡単にまとめ、3節で本稿で使用するデータとそのインフォーマントを示す。続く4節でいくつかの言語項目を選んで日系カナダ人の日本語変種の使用実態を記述したあと、5節で日系カナダ人の日本語変種の形成過程を考察することにする。

2. 日系カナダ人の歴史的背景

最初に、日本人がカナダに居住するようになった経緯とその後の状況について、ごく簡単にまとめておこう(本節は、渋谷・簡2013による)。

新保(1996: 8) は、カナダにおける日系人の歴史を、その法的地位によって次の4つの時期に分けている。

〔第1期〕日本人が最初にカナダへ渡った1877年から、1908年に日本政府とのあいだにルミュー協定が締結され、日本からの移住が制限されるまでの自由渡航時代。当時のカナダは漁業、農業、林業、製材業、鉱業などが盛んで、鉄道建設や港湾建設なども行われており、貧困から抜け出すために多くの日本人が出稼ぎ労働者としてカナダに渡った。移民の多くは太平洋沿岸のバンクーバー周辺に集まって暮らし、パウエル街には日本人街(リトル・トーキョー)、またその周辺には漁業を主とするスティーブストンなどの日系人コミュニティが形成された。しかし、カナダに移住した日系人の歴史

は、差別と排斥の歴史であり、1907（明治40）年には白人たちが、東洋系の移民がヨーロッパ系カナダ人の職を奪っているとして、バンクーバーの日本人街・中国人街を襲うバンクーバー暴動を起こしている。ちなみに、この時点での日系人数は約8,000人で、その多くが独身男性である。この暴動の結果、カナダ政府と日本政府との間にルミュー協定が締結され、日本からカナダへの移民は、カナダ在住日本人が必要とする家内使用人と農場で働く契約移民について年間400名と制限されることになる。ただし、カナダ在住者の妻子はこの枠外であった。なお、1912年および1920年当時の日系カナダ人一世の主な出身県は、表1のとおりである（佐々木1992:70）。西日本出身者に偏っており、カナダで使用される日本語変種に西日本方言の要素をもたらす要因となっている。ちなみに、表には記載がないが、東日本では宮城県、福島県、神奈川県などの出身者が多い。

表1 日系カナダ人一世の主要出身県

	1912（明治45）年		1920（大正9）年	
滋賀県	1,953	19.85	3,054	17.48
和歌山県	1,436	14.59	2,597	14.86
広島県	976	9.92	1,758	10.06
熊本県	813	8.26	1,417	8.11
福岡県	737	7.49	1,375	7.87
5県合計	5,915	60.11	10,201	58.37
総人口	9,840	100.00	17,475	100.00

（佐々木1992:70より。左：人口、右：％。一部記載を変更）

〔第2期〕1941年に真珠湾攻撃が行われ、法的に「敵国人」と規定されるまでの苦闘の時代。移民の渡航は制限され続けるが、二世も誕生して日系人口が増えており、一応安定した日系人コミュニティが形成されていた。また、日英同盟のもとで日本がカナダと同盟関係にあった第一次世界大戦中は、日系人が義勇兵としてヨーロッパ戦線で戦ったことなどもあって、カナダ社会の日系人に対する態度もそれほど悪いものではなくなっていたが、

1941年12月8日（日本時間）に真珠湾攻撃が起こる。この時点での日系人は約23,000人である。

〔第3期〕1949年3月31日に法的拘束が完全に廃棄されるまでの受難時代。真珠湾攻撃の結果、日系人は、カナダの国籍をもっているか否かにかかわらず、カナダ政府から敵性外国人と規定された。また、1942年2月26日に発令された総移動令によって、日系人は、カナダ本土の太平洋沿岸から内陸100マイル以内と設定された「防衛地域」から撤去することを命じられ、財産も多くを没収されて、ロッキー山脈のなかの収容所に入れられることとなった。ただし、戦争などで不足する労働力を補うために、ブリティッシュ・コロンビア州内部での道路建設（ロード・キャンプ）や、アルバータ州、マニトバ州などの砂糖大根（シュガービート）農場で働くという選択肢も与えられている。カナダ政府が家族単位で移動することを認めたこともあって、移動した日系人の半数近くがこの道を選んだ（村井2000: 322）。

〔第4期〕今日にいたるまでの復興時代。戦後、日本へ帰国する人もいたが、同化を目的とするカナダ政府の分散政策のもと、バンクーバーにはもどらずに、トロントを中心とするオンタリオ州など、ロッキー山脈の東に移動することを選んだ人も多い（飯野1997: 5章）。このような移動は、かつてバンクーバーにあったリトル・トーキョーのような、日本語を使用する緊密なコミュニティが育つことを妨げる要因としてはたらく、カナダから日本語が消滅することを早める結果となったと思われる。

3. データとインフォーマント

日系カナダ人の日本語変種の実態を写し取ったデータには、1節にあげたような、日系カナダ人のことばの特徴を明らかにすることを目的として行われた研究のなかで収集されたデータのほかに、日系カナダ人のライフストーリーを描き出すことを目的として収集された会話のデータがいくつかある。本稿では、以下の2冊に収録されている会話の文字化資料を使用して、これ

らのデータの有用性を確認しつつ、日系カナダ人の日本語変種の実態とその成立過程を考えてみることにする。

真壁知子（1983）『写真婚の妻たち—カナダ移民の女性史—』未来社
 村井忠政（2000）『日系カナダ人女性の生活史—南アルバータ日系人社会に生まれて—』明石書店

真壁（1983）は一世5名、村井（2000）は二世1名にインタビューを行ったもので、収録されている資料のインフォーマントおよびその属性は、それぞれ、表2、表3のとおりである。氏名については、その記載にしたがった（表2の真壁のインフォーマントは仮名である）。

表2 真壁（1983）のインフォーマント（一世）

	生年	出身	渡加	カナダの居住地（一部）
福島マキ	1892	山口県大島郡	1913	ニューウエストミンスター、ステイプストン、バンクーバー、トービン列島、レスブリッジ、レイモンド、トロント
村田ハナ	1895	滋賀県彦根市大藪町	1918	バンクーバー、スキーナ、ビクトリア、スローキャン、トロント
石川矢須	1896	広島県神石郡油木町	1919	バンクーバー、ギスカム、スワンソーベイ、プリンスルパート、タシメ、トロント
中村民	1896	広島県広島市	1916	ミッション、バンクーバー、レスブリッジ、モンリオール、トロント近郊
林みよ	1902	鹿児島県姶良郡東国分村	1923	ハイリバー、ウェリング、バーンウェル

表3 村井（2000）のインフォーマント（二世）

	生年	出身	両親の出身地	カナダの居住地（一部）
マツヨ モリヤマ	1914	アルバータ州レイモンド	福島県佐倉	レイモンド、レスブリッジ、カルガリー

それぞれの巻末記載の著者略歴によれば、インタビュアーの真壁は福島

県、村井は東京都の出身である。インタビューデータであるので、インフォーマントが使用したことばはフォーマル度の高いものと思われる。4節で具体的に見るように、丁寧体も多用されている。

文字化の方法については、真壁（1983）にはとくに記載がないが、村井（2000: 349-350）には次の記載がある。

〔インフォーマントである〕マツヨさんの語り口をできるかぎり忠実に再現することに努めたが、意味不明な箇所や明らかに事実の誤認と思われる場合は訂正した。またこのような聞き取りにおいては同じ話の繰り返しが多かったり、話が前後したりすることは避けられないが、読者の読みやすさを考えて、重複部分を削除したり整合性を持たせるなど若干の編集をしている。

したがって、会話のなかで使用されたことばを必ずしも忠実に写し取っているわけではない。この点、これらの資料を素材として日系カナダ人の日本語変種を記述するには問題があるところであるが、本稿ではこれらの問題は保留し、まずは資料のことばを対象にして分析を行う。

4. 日系カナダ人の日本語変種の実態

本節では、上の資料を使用して、日系カナダ人一世および二世の日本語変種の実態を概観する。

渋谷・簡（2013）で指摘したように、日系カナダ人が使用する日本語変種には、一般に、（話者ではなく研究者の視点で見たとき）表4に示すような言語要素が含まれている。

表4 日系カナダ人の日本語変種の構成要素

- (A) 第一方言として身につけた日本語母方言の要素（ベース）
- (B-1) 日本語方言話者と接触して習得した日本語の他の方言の要素
- (B-2) 英語母語話者や英語非母語話者等と接触して受容した英語の要素
- (B-3) マスメディア等を通じて接触して受容した日本語標準語の要素
- (C) 話者自身による独自の創造（他の話者が創造したものを受容した場合もあり、その場合は（B-1）相当）

一世の場合、カナダで日常的に使用する、上の要素を含む日本語変種は、コイナー的な第二方言であり、（その程度は渡航時の年齢などとも関連してさまざまであろうが）母方言は母方言として、別に維持されていたものと思われる。一方、英語とのバイリンガルである二世の使用する日本語変種は、話者が家庭や日系コミュニティのなかで、コミュニケーションの必要性から自然に身につけた母語あるいは（英語が母語の場合）第二言語である。一世の母方言は、理解できたかもしれないが、使用能力はほとんどなかったものと思われる（ただし、二世のモリヤマは、子どものころ、その使用する日本語について、「あなたの日本語は駄目です。そういう福島の訛じゃ通らんです」と指摘されたと述べている。村井2000: 123）。

以上のことを踏まえたうえで、以下では、否定辞（4.1）、ワ行五段動詞と形容詞の音便形（4.2）、存在動詞・アスペクト形式（4.3）の3つの言語項目に注目し、それぞれの使用実態について、上の表4の（A）母方言要素、（B-1）他方言要素、（B-3）標準語要素、（C）独自に創造した要素が、それぞれの話者の発話のなかになどのように混在するかを整理することにする。いずれの言語項目も、話者たちが使用する日本語変種の形成過程を明らかにするための手がかりとなるものである。なお、（B-2）の英語の要素については、たとえば福島マキの発話のなかでは、数字（ワンモアマイル）や職業関係の語（親のヘルプ、キャナリー、デーワーク、ソーミル、コントラクト、ポーシン）などが使用されているが、本稿では取り上げない。

4.1 否定辞

最初に、否定辞について見てみよう。ここでは便宜的に、常体・非過去形(4.1.1)、丁寧体・非過去形(4.1.2)、過去形(4.1.3)、当為・禁止表現(4.1.4)にわけて結果を示す(語形を問題にしているので「常体・丁寧体」という文体に言及する用語は不適切であるが、ここでは便宜的に語形を示すのにこの語を用いる)。

4.1.1 常体・非過去形

表5は、否定辞のうち、話者が常体で使用した非過去形を整理したものである(当為・禁止表現は除く。以下、4.1.3まで同様)。ントとあるのは、

- (1)〔結婚〕相手はどんな人やら、こんな人やら知りもせんと、アメリカへ貰われて行くのならと喜んでいましたよ。(福島、46)

のような従属節を構成する形式で、この場合にはンが排他的に使用される。同じく従属節で用いられるセズ(二)とともに、参考までにあげた。

表5 否定辞(常体・非過去形)

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
ン	34	90	18	-	15	157	126
ント	13	9	3	-	3	28	-
ヘン	-	4	-	-	-	4	-
テヘン	-	1	-	-	-	1	-
テオラン	-	-	-	-	-	-	10
ナイ	13	2	12	21	6	54	100
テナイ	3	1	-	1	-	5	13
テオラナイ	-	-	-	-	-	-	9
セズ(二)	3	6	2	7	1	19	14

- ・テナイはテイナイを含む。
- ・その他（慣用的、複合的なもの、関連形式など。外数。以下同様）
 - ・福島：カナワヌ1
 - ・村田：ヨウヘン5
 - ・石川：ンダロウ1、ヨウヘン6
 - ・中村：ナクナッテ1、思イモ及バヌ1、比較ニナラス1
 - ・林：ヨウヘン4
 - ・モリヤマ：ナクナル/ナクナッテ5、ンダロウカ1
 ヨウヘン1、ヨウヘナイ1、ヨウデキナイ1、
 ヨウシメキラン1、ヨウカケナイ1、ヨウアルケナイ1、ヨクハタラケナイ1
 カモシラン4、カモシレナイ3

この表からは、次のことが理解できる。

(a) 否定辞は、一世全体としてはンに偏っている。ヘンは滋賀県出身の村田が使用しているが、その数はわずかである。ここから、カナダではンをもつ日本語変種が二世の目標言語となったことがうかがわれるが、モリヤマではンの使用が相対的に減少している（47.3%）。このことの原因としては、モリヤマの両親の出身地が福島であること、二世においては（マスメディア等からのインプットもあって）共通語形であるナイが優勢な形式になりつつあることなどが考えられるが、結論を得るためには他の二世の実態も確認する必要がある。

(b) 一世を個人ごとに見ると、ンとナイを併用しつつンを多用する話者が多いが、中村のように、排他的にナイを使用する話者もいる。ちなみに、中村は、以下に見るように、取り上げたどの言語項目についても共通語の要素を多用している。

(c) 二世のモリヤマは、一世には使用がないテオラン、テオラナイといった形を使用している（4.3の存在動詞・アスペクト形式も参照）。なお、モリヤマのヨウによる可能形は、デキナイ、シメキラン、アルケナイなどの他の可能形式と共に起しており、それ自身の可能の意味が希薄になっているようである。ヨクという非音便形も使用されている。

4.1.2 丁寧体・非過去形

次に、丁寧体で使用した非過去形を見てみよう。表6のような実態である。

表6 否定辞（丁寧体・非過去形）

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
ンデス	3	-	8	-	4	15	12
シノデス	7	-	9	-	6	22	17
ナイデス	-	-	-	-	-	-	3
ナインデス	4	-	1	12	1	18	25
マセン	12	-	18	15	15	60	42

- ・数が少ないため、表1と異なり、アスペクト形は区別していない。
- ・ナインデスはナイノデスを含む
- ・その他
 - ・石川：シノデショウ2、ンデショ1
 - ・中村：ナイデオリマス1、ナイデオリマシタ1
 - ・林：ソウデス1； ンデショウ1； カモシレマセン1
 - ・モリヤマ：シモノデスカラ1； ナイデショウ5、ンデショウ7； ンデオリマシタ1
カモシレンデス1、カモシレマセン2

この表からは、次のようなことが見てとれる。

(a) マセンを除き、常体の場合と同様、一世は中村を除いてンに使用が偏り、二世ではンとナイがほぼ半数ずつである。

(b) 融会的なマセンと、分析的なンデス・ナイデスでは、一世、二世ともにマセンの使用のほうが多い。ナイデスは二世のみが使用している。

4.1.3 過去形

否定辞の過去形（タラ形を含む）の使用実態は、表7のようである。数が少ないので、常体と丁寧体をあわせて示す。

表7 否定辞（過去形）

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
ンカッタ	1	8	-	-	-	9	1
ンカッタデス	2	-	-	-	5	7	1
ンカッタンデス	1	-	1	-	-	2	-
ナカッタ	1	5	4	-	-	10	33
ナカッタデス	4	-	3	-	4	11	30
ナカッタンデス	-	-	-	2	-	2	22
マセンデシタ	14	-	8	13	8	43	5

・表1と異なり、アスペクト形は区別していない。

・ナカッタンデスはナカッタノデスを含む

・その他

・福島：ンカッタラ1； テナカッタノデ1

・村田：ンカッタラ2

・中村：ナカッタデショウ1、

・林：ナカッタソウデス3； ナカッタラ1

・モリヤマ：ナカッタワケデス1； ナカッタラ3

ナクナッタ1、ナクナリマシタ1、ナクナッタノデス1

過去形は、非過去形の場合とは異なった、次のような使用実態である。

(a) マセンデシタを除くと、一世の場合、ンとナイの使用数に大きな違いはないが（中村を除く）、二世ではほぼナイを専用する状況となる。先に、非過去形においても、一世から二世にかけてンからナイへ移行する状況にあることを推測したが、その移行は過去形が先行しているようである。このことには、過去形は主に過去の事実を語る場合に使用されるのに対して、非過去形のンは、次のように、話し手の（打ち消しの）意志など、モーダルな意味を担う場合があり、

(2) 私、それでも「結婚せん」って言いましたの（モリヤマ、128）

二世にもそのようなモーダルな非過去形の用法が継承されているといったことがあるのかもしれない。

(b) 丁寧体のマセンデシタとンカッタデス・ナカッタデスでは、一世は

マセンデシタの使用が多いが、二世では分析形式であるナカッタデスがほぼ専用される。なお、一世のインフォーマントの母方言ではナンダが使用されていたはずであるが、本データのなかでの使用は観察されなかった。ナンダは、融合形式（否定と過去が分化されていない形式）であるために、あるいは方言として意識される度合いが高いために、多くの方言が接触する場では避けられたのかもしれない。

4.1.4 当為・禁止表現

否定辞について、最後に、当為・禁止表現での使用状況も見ておこう。表8のような実態である。

一世の用例数が少ないので傾向が見えにくいだが、それでも、次のような特徴を伺うことができる。

(a) 一世は多様な形式を使用しているが、当為表現については、福島と村田が前部要素、後部要素ともにン系に偏るのに対して、石川は前部要素がナイ系に収斂しつつあるように見える。

(b) 二世の場合、当為表現は前部要素がナイ系、後部要素がン系のナクチャ+ナラン、禁止表現はテハ／チャ+イケナイが多用される。前部要素は両表現とも条件形（ナク）テハとその融合形チャにほぼ統一されているが、後部要素は、当為表現がナラン（ただしイケナイも多い）、禁止表現はイケナイのように、両者で異なった否定辞が選択されている。その理由は不明である。

表8 当為・禁止表現等

		福島	村田	石川	中村	林	モリヤマ
ニヤ	ナラン	5	6	-	-	-	-
	ナランカッタ	1	-	-	-	-	-
	ナラナカッタデス	-	-	1	-	-	-
	ナリマセン	1	-	-	-	-	-
	イケン	-	-	1	-	1	-
ナ	ナラン	-	-	-	-	-	1
ン	ナラン	-	-	-	-	-	1
ント	イカン	-	-	-	-	-	1
ナキャ	ナラン	-	-	2	-	-	1
	ナラナカッタデス	-	-	1	-	-	-
	イケン	-	-	1	-	-	-
	イケナイ	-	-	-	1	-	1
ナケレバ	ナラナイ	1	-	-	-	-	1
	ナラナイデス	-	-	1	-	-	-
	イケナイ	-	-	-	-	-	2
ナクチャ	ナラン	-	-	-	-	-	28
	ナラナイ	-	-	-	-	-	4
	ナラナカッタ	-	-	-	-	-	1
	イカン	-	-	-	-	-	3
	イケナイ	-	-	-	-	-	12
ナクテハ	イケマセン	-	-	-	-	-	1
テハ・ チャ	イカン	2	-	-	-	-	1
	イケン	-	-	1	-	-	-
	イケナイ	-	-	-	-	-	21
	イケナイノデス	-	-	-	-	-	2

その他（φは後件を欠いていることを示す）

- ・福島：ニヤ+φ1、ンデモイイ1；ワケニ（ハ）イカン2、ワケニハイキマセン1
- ・村田：ニヤ+後件1、ンデモエエ1；ドウモナラン1
- ・石川：ニヤ+後件2；ワケニハイカン2、ウマイコトイカン1
- ・中村：ナキャ+後件2、ナキャ+φ1、ナイデイイ1、ナクテイイ1
- ・林：出サナラン1、ンデイイ1；ドウモナラン1
- ・モリヤマ：ナケレバ+後件15、ナクチャ+後件1、ナケレバ+φ1、ナクチャ+φ3
N（名詞）ガナク [テハ/チャ] イケナイ4、Nデナクチャナラン1、Nデナクチャイケナイ1、ナクチャナラヌハズ1、Nジャイケナイ2、コレデハイケナイ1
ンデ（モ）イイ7、ンデモ+後件2、ナクテモ+後件2、ンホウガイイ1

4.2 音便形

次に、音便形の使用実態について、ワ行五段動詞のウ音便形と促音便形

(4.2.1)、形容詞のウ音便形と非音便形(4.2.2)にわけて概観する。

4.2.1 ワ行五段動詞音便形

ワ行五段動詞の音便形の使用実態は、表9のようである。使用例の多い動詞については、個別に取り出して整理した。

表9 ワ行五段動詞の音便形(左:ウ音便形、右:促音便形)

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
言ウ	28/10	41/0	27/5	0/7	19/4	115/26	240/84
買ウ	0/2	8/0	2/1	0/8	8/1	18/12	31/0
思ウ	20/13	24/8	17/19	0/17	4/1	65/58	10/112
(テ)モラウ	5/14	19/2	0/16	0/5	2/10	26/47	1/36
テシマウ	3/16	19/1	0/10	1/9	6/5	29/41	2/47
その他	11/14	4/13	3/28	0/23	4/12	22/90	7/74
計	67/69	115/24	49/79	1/69	43/33	275/274	291/353

*テシマウのウ音便形はテモウタを含む。

*もともといずれかの音便形しかない(バリエーションのない)動詞は除いた(問ウテなど)

この表からは、次のことがわかる。

(a) 一世の使用する動詞全体としては、ウ音便形と促音便形の使用が拮抗する。ただし個人差があり、村田はウ音便形を多用するが、中村はほぼ促音便形を専用している。

(b) 二世は、促音便形のほうを多用している。

(c) ウ音便形が使用されるか促音便形が使用されるかには動詞によって大きな違いがあり、ウ音便形は、表に個別に示した「言う・買う・思う」などに偏って使用される。そのなかでも「言う」については、一世、二世とも、ウ音便形の使用率が際だって高い。また、二世においては、「言う・買う」の2つの動詞のみについて、ウ音便形が、固定して使用されるようになりつつあるように見える。「言う」については、使用数が多く、また実質的な意味を担うよりも「～いうて」のような形式で文法的な機能(引用)を担

うことが多いといったことがあるが、「買う」にはそのようなことはない。「言う」と「買う」に共通するのは2拍の動詞という点であり、[ju:] [ko:] といった2拍（1音節）の長音（語幹）が安定／固定して使用されるようになったということであろう。

4.2.2 形容詞ウ音便形

形容詞（副詞を含む）のウ音便形・非音便形については、表10のような使用実態である。使用数の多いヨウ／ヨクを個別に取り出して示す。

表10 形容詞（副詞）のウ音便形・非音便形（左：ウ音便形、右：非音便形）

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
ヨク	1/16	6/7	5/13	0/17	14/17	26/70	63/21
その他	0/25	0/26	4/28	0/31	2/25	6/135	0/98
計	1/41	6/33	9/41	0/48	16/42	32/205	63/119

*希望のタイを含む。

*亡クナルはすべて非音便形であるので、除外した。その他、ウ音便形として使用されにくいもの（デキナクナルなどの否定辞ナイ、マモナクなど）も除外した。

*可能の副詞ヨウも除外した。（用例数は、4.1.1の表5の下に記載）

ここでも、一世、二世を通じて、副詞として用いられるヨウ（これも2拍である）の使用率が高いものの（一世よりも二世のほうがウ音便形の使用率が高い）、他の形容詞については、動詞についてウ音便形を多用した話者（村田・石川）でも、ウ音便形をほとんど用いていない。『方言文法全国地図』第3集第137図「高くない」、第138図「高くて」、第139図「高くなる」では西日本にウ音便形が広く分布していることを考えると、ウ音便形がもっと多用されてもよいように思われるが、カナダでの実態はそのようにはなっていない。

4.3 存在動詞・アスペクト形式

最後に、存在動詞（4.3.1）とアスペクト形式（4.3.2）の使用実態を整理

する。

4.3.1 存在動詞

存在動詞は、表 11 のような使用状況である。なお、この表のアル（アル、アルデス、アルンデス、アリマス）は参考までに示したもので、「出稼ぎに出る人はあった」「私にはおばあさんがあった」のように、「人ガアル」のかたちで標準語でも使用されるものである。和歌山方言に特徴的な、「場所ニ人ガアル」の存在文で使用されるアルではない。

表 11 存在動詞

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
オル	12	61	14	1	16	104	44
イル	1	-	-	4	-	5	5
アル	4	5	-	1	2	12	12
イテル	-	1	-	-	-	1	-
オルデス	1	-	2	-	-	3	6
イルデス	-	-	-	-	-	-	-
アルデス	-	-	1	1 (1)	-	2	1
オルンデス	1	-	4	1	1	7	9
イルンデス	-	-	-	-	-	-	3
アルンデス	1	-	1	2	2	6	-
オリマス	7	-	6	6	3	22	15
イマス	-	1	-	6	1	8	2
アリマス	2	-	1	4	-	7	4

- ・否定・過去・可能形を含む。
- ・カッコ内はデショウの形。内数。
- ・{|オル／イル／アル| ンデスのンは、数は少ないが、ワケ・モノ；ソウ・ヨウ・ラシイ；ダケを含む。
- ・その他
 - ・福島：オラレマス1、オラレル2
 - ・石川：(人が) ナイ1・ナカッタデス1
 - ・中村：(人が) ナカッタデス1
 - ・モリヤマ：オラレタ2、オラレタノデス1

存在の意味では、一世、二世ともに、常体、丁寧体いずれにおいてももっぱらオルが使用されている。

4.3.2 アスペクト形式

アスペクト形式の使用実態は、表 12 のようである。使用例のなかでは、ヨルは進行相もしくは習慣を表し、トルは進行相、結果相、習慣等を幅広く表しているが、文脈を考慮しても個々の例をそれぞれの意味に分類することはむずかしい場合があり、ここでは、進行相と結果相にわけて整理することはしていない。形式だけを整理した。

表 12 アスペクト形式

	福島	村田	石川	中村	林	一世計	モリヤマ
ヨル	4	3	-	-	2	9	8
トル	9	47	12	-	7	75	59
テオル	7	62	19	-	18	106	329
テイル	30	31	16	30	8	115	63
ヨルデス	5	-	12	-	12	29	12
トルデス	5 (2)	1 (1)	9	-	5 (1)	20 (4)	16
テオルデス	2	-	8 (1)	-	12 (2)	22 (3)	67 (26)
テイルデス	-	-	2	-	-	2	7 (2)
ヨルンデス	-	1	-	-	2	3	1
トルンデス	7	1	5	-	2	15	13
テオルンデス	4	-	5	-	4	13	69
テイルンデス	3	-	4	18	1	26	13
ヨリマス	2	-	2	-	5	9	-
トリマス	14	1	8	-	18	41	6
テオリマス	12	-	9	2	6	29	123
テイマス	38	3	40	64	32	177	12

- ・テイルはテルを含む。
- ・否定・過去形を含む。
- ・カッコ内はデショウの形。内数。
- ・{ヨル／トル／テオル／テイル} ンデスのンは、数は少ないが、ワケ・モノ；ソウ・ヨウ・ラシイ；ダケを含む。
- ・補足およびその他
 - ・福島：テオルデス・トルデス・ヨルデスは1例を除きタ形。テオラレマシタ1
 - ・村田：テイルにはテハル3、テヤル2、テヘン1を含む。ントオッタ1、ンダイテモ1
 - ・石川：ヨルデス・トルデス・テオルデス・テイルデスはテイルデス1例を除きタ形。テバッカリオッテモ1
 - ・中村：ナイデオリマシタ1、ナイデイマス1、テイテクレマシタ1、
 - ・モリヤマ：テオラレタ1、テオラレタデス1、テオラレタデス2、テオリナサイ4
トッテクレタデス1、ンデオリマシタ1、テオッテアゲマス1、テイナサイ1、

表からは、次のようなことがわかる。

(a) 一世は、テイルをほぼ専用する中村を除き、ヨル・トル・テオル・テイルを使用する。話者によって違いがあるが、その使用には、おおむね次のような特徴がある。

- ・常体では、ヨル・トル・テオルなどの方言形のほうが多用されているが、テイルの使用も多い。
- ・一方、(ンデス形ではなく) デス形ではヨルデス・トルデス・テオルデスなどの方言形がほぼ専用され、テイルデスの使用はほとんどない。
- ・ンデス形(標準語と同形)ではテイルンデスが多くの、トルンデス、テオルンデスも多い(後二者をあわせれば、テイルンデスとほぼ同数になる)。
- ・マス形では、ヨリマスやトリマスの使用もあるが、テイマス(標準語と同形)の使用が顕著である。これは、上記、(ンデス形ではなく) デス形の場合と対照的で、マスは標準語的な形式と意識され、アスペクト形式の選択にも強い影響を与えているものようである。

(b) 二世については、ヨル・トル・テイルも使用されるが、常体、丁寧体のいずれにおいてもテオルが優位に使用されている。テオルは一世でも多用されているが、一世でテイルの使用が多かったンデス、マスなどが後接する場合にもテオルが選択されるなど、その傾向がより鮮明になっている。

4.4 二世の日本語変種に見るその他の特徴的な形式

ここで、日系カナダ人二世が使用する日本語変種を形成した要因を考えるための、その他の特徴的な方言形式を確認しておこう。次のような形式が観察された。

(A) 福島方言(東北方言)の要素

オチル(「降りる」の意)、(ドアガ)開カル、(裸に)シラレル(ただし『方言文法全国地図』第3集第117図「される」によれば西日本でも使用される)

(B) 西日本方言の要素

デケン（出来ない）、セヤカラ、ワヤ（むちゃくちゃ）、コジケタ（成長がとまった）、エライ（つらい）、エー（いい）、払いキラン、（指輪を）はめてミレ、隠レゴト

(C) 独自の創造形式

ニギヤカク（にぎやかに）、動詞ル形・タ形+デス（表 12 のアスペクト形式+デスも参照）

4.5 まとめ

以上をまとめれば、日系カナダ人一世、二世の日本語変種の特徴は、次のようにまとめることができる。

① 一世においては、自身の母方言を維持しつつも、他の方言や標準語に接触して同じ意味を表す複数の形式を身につけた場合には、いずれかの形式に収斂させようとする傾向が伺える。その形式は、必ずしも母方言の形式とはかぎらない。また、否定過去のナンダや形容詞の（ヨウを除く）ウ音便形など、母方言では使用される形式でも、融合的であるためか、あるいは方言的な色合いが強いと意識されているためか、移住当初から使用が避けられたように思われる形式もある。

② 二世においては、全体的に標準語的な形式へと収斂しつつあるように見えるが（否定辞ナイ、動詞促音便形、形容詞非音便形）、一部の方言形は根強く継承され（常体での否定辞ン、言う・買う・ヨクのウ音便形）、さらに標準語形ではない形式に収斂するケースも見出される（存在動詞、アスペクト形式の（テ）オルなど）。

5. 日系カナダ人の日本語変種の形成過程試論

では、前節で見たような実態をもつ日系カナダ人の日本語変種は、どのようなプロセスを経て形成されたのであろうか。本節ではこのことについて考

えてみよう。

5.1 カナダにおける言語シフト

日系カナダ人が日常的に使用することは、世代を追うごとに、日本語から英語にシフトしている。このプロセスを（話者の、各言語のスタイルシフトの能力やコードスイッチの能力を無視して）簡略に示せば、図1のようになる（渋谷2014）。

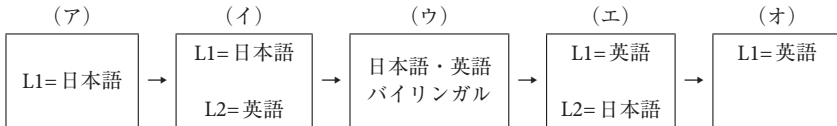


図1 日系人の言語シフト (L1=母語、L2=第二言語)

基本的には、(ア)と(イ)が一世、(ウ)が二世、(エ)と(オ)が三世以降の言語状況である。(ア)および(イ)のL1(第一言語)=日本語は、少なくとも初期の移民が日常的に使用したものは、標準語ではない。それぞれの母方言、もしくは、4節の結果から推測されるような、母方言の要素がまじった変種である。ちなみに、一世が使用した(イ)のL2(第二言語)=英語も、標準英語ではなく、まわりのカナダ人労働者が話す英語の方言、もしくは、先にカナダに渡っていた日本人などが使用した(ピジン的な)英語であったと思われる。また、(ウ)の、二世が使用する日本語変種は、4.5でも述べたように、一世の使用した日本語変種のなかの多様性が淘汰された、コイナー的な変種である。

では、4節で見た一世と二世の日本語変種は、(ア)から(ウ)にかけてのプロセスのなかに、具体的にどのように位置づけられるであろうか。次節では、(ア)～(ウ)の日本語の部分拡大して、日系カナダ人の日本語変種が形成されたプロセスを考えてみることにしよう。

5.2 日系カナダ人の日本語変種の形成過程

日系カナダ人（あるいはカナダにかぎらず、ハワイやブラジルなども含めて日系移民一般）の日本語変種の形成過程を考えるためには、図2や図3のようなプロセスからなるモデルを考えるのが便宜である（各システムは不連続なかたちで記しているが、同じ話者でも時間軸に沿って連続的な様相を呈する。なお、この考え方は、Mufwene (2001: ch.1) のものと基本的に同じものである）。

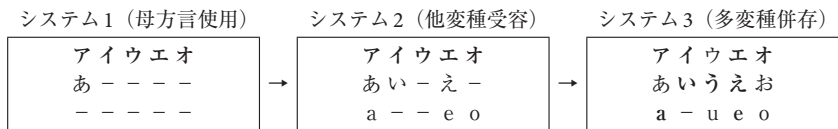


図2 [プロセスI] 一世による他方言の受容／習得

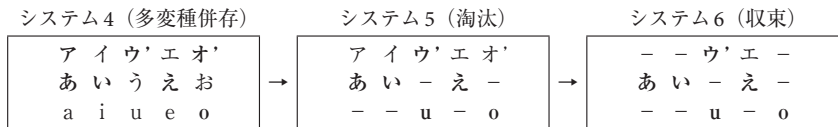


図3 [プロセスII] 二世による多様性の収斂（コイナー化）

この図は、主に、個々の話者の言語能力をモデル化したものである。おおまかには、プロセスIは一世で起こった言語能力の変化、プロセスIIは二世で起こったそれである（受容／習得と収斂は、実際には一世でも二世でも起こりうる）。図のなかで「ア」のように太字で示したものは使用形式、そうでないものは理解形式で、「ア～オ」は母方言（二世の場合両親の出身地の方言）、「あ～お」は標準語の形式、「a～o」は母方言以外の形式とする（いずれも研究者の視点で見たものである。話者がそう意識しているかどうかはわからない）。「ア、あ、a」とあるのは、異なった方言もしくは言語の、意味的に対応する言語形式（たとえば「わし、わたし、me」など）が、個

人の言語知識のなかで、バリエーションとして存在していることを示す。図では、仮に5つの言語変項を取り上げた（もちろん、「山、川」などの基礎語彙のように、3つの変種で形式と意味が同じである要素もある）。

以下、それぞれのシステムごとに話者の言語能力状況を見ていく。最初に、一世の日本語能力を示した図2について述べる。

〔システム1〕日本からカナダに渡った時点での日本語能力を示す。この時点では母方言が優位な変種であり、標準語能力をあまりもっていなかった可能性がある。

〔システム2〕カナダに渡ってさまざまな方言を使用する話者たちと接触し、自身のこととは異なる変種があることに気づきつつ、聞いて理解できる形式を増やしていく段階である（その結果、Mufwene (2001: 4) の言う feature pool ができあがる）。この段階のバリエーションは一時的に存在したものも多く、また、それぞれの具現形のなかには必ずしも社会的な情報を担ってはいないものがあつたと思われる（ランダムバリエーション）。カナダの事例ではないが、この段階において移住者のあいだには、現地の日本語について、次のような意識があつたことが記録に残されている。

- (3) …日本人同志が、話が通じなかつたんですぞ。山形県であろうが、新潟県であろうが、福島・宮城であろうが、一遍ですぐ話が分るなんて奴はおらんかつたから。そこさきてからに、山口だ、広島だときたら、もう分らん。九州なんかときたら、もっと分らんかつた。(ハワイ、福島出身、前山1986: 68)
- (4) 同じ場所で二つ以上の方言が常にいりみだれていると、さてどちらが本当だろうかという疑念が起る。われわれは標準語と方言を対立させて、これは標準語であり、これは方言であるということを教えられたことがないのである。(ブラジル、栃木出身、半田1966: 120-121)

〔システム3〕聞いて理解できる形式を増やしつつ、自身の母方言ではない一部の形式を使用してみる段階である。4節で整理した一世のことは、この段階のものだと思われる。

次に、図3の、二世の日本語能力について述べる。

〔システム4〕二世は、まわりの一世が使用するさまざまな変種を聞きながら、日本語を母語もしくは第二言語として身につける。この段階では、理解能力としてはもちろんのこと、使用能力としても複数の形式（具現形）をもっていたものと思われる。また、二世は、一世が使用していた日本語変種をそのまま引き継ぐだけでなく、形式や意味の面で独自に変容を加えた要素ももっていたものと思われる（図で「'」を付した、中間方言的な要素。4.4で見た「ニギヤカク」（にぎやかに）など。なお、図2には示していないが、このような独自の変容を加えられた要素は、一世が習得した他方言の要素のなかにもあったと思われる）。

〔システム5〕しかし、たとえば同世代の話者などとのコミュニケーションが頻繁に行われるようになり、また、成長して一世がまわりにいなくなってくると、多様なバリエーションが淘汰され、少なくとも使用面では特定の形式に限定されるようになってくる。この淘汰の過程においては、一世においては方言的な形式だったものが二世においてその方言色を失う（コイナー化の一環）など、それぞれの形式に焼きついた社会的な情報が再調整される過程もあったものと考えられる。

〔システム6〕以上のような過程を経て、カナダの日系人の日本語変種が、安定したシステム（コイナー）に落ち着く段階である。

4節でみた二世の日本語能力は、システム5（もしくは6に近い）段階にあったものと思われる。

なお、本稿では具体的に考察することはしないが、このプロセスにおいては、Mufwene（2001）や渋谷（2010）が整理した、表13のようなさまざまな形成要因がかかわったものと思われる（渋谷2010のものを修正、拡張した）。

表13 日系カナダ人の日本語変種の形成プロセスにかかわる諸要因

話者の心理的要因
<ul style="list-style-type: none"> ・話者のアイデンティティ ・話者の性格的な要因（内向的－外向的、フィールド依存－独立、など） ・話者の日本（人）や他言語集団に対する意識 ・話者の日本語や英語に対する意識（好悪、有用性意識など） ・話者が認識する日本語と英語のあいだの言語的距離 ・話者が認識する個々の日本語（英語）要素の認知的突出性（saliency） ・話者にとっての個々の日本語（英語）要素の処理の難易度、など
話者のミクロの社会的要因（インターアクションの実態）
<ul style="list-style-type: none"> ・日本語（英語）や個々の日本語（英語）要素との接触頻度 ・日本語（英語）によるインターアクションの目的 ・日本語（英語）によるインターアクションの頻度 ・日本語（母語）話者間の／英語（母語）話者からのアコモデーション、など
マクロの社会的要因（共同体の社会的状況）
<ul style="list-style-type: none"> ・移住目的 ・日系人集団と他言語集団の人口比 ・日系人集団と他言語集団の社会的地位や力関係、経済力 ・日系人集団の集住度、日系人集団と他言語集団との混住度・接触度 ・カナダ政府による（言語）政策、など

形成要因ということでは、その他、

- ・カナダでは日本語の書記生活がかざられること（モリヤマの場合、書きことばについての能力はほとんどもっていない。村井2000: 29）
- ・カナダには、日本の言語政策が及ばないこと

なども考慮すべきことである。

6. 今後の課題

以上、本稿では、戦前に移住した日系カナダ人一世5名および日系カナダ人二世1名の、ライフヒストリーを描くために収集された談話データを対象として、4節でいくつかの言語項目を選んでその日本語変種の実態を記述し、5節ではその結果に基づきつつ、日系カナダ人の使用する日本語変種の形成過程をモデル化して考えてみた。

しかし、5節で提示したモデルは多分に推測を含むものであり、本稿で対象とした真壁データ、村井データだけでは実証できない部分が多い。実証するためには、以下のような、過去に収集され、残されているデータを地道に探し出す必要がある。ここでは、一世のデータを例にして述べる（同じ地域に居住し続けた話者たちのデータが望ましいところであるが、2節や3節のインフォーマント情報で述べたように、カナダではその社会的・経済的・政治的な状況から内部で移住を繰り返した話者が多いので、地域を限定してデータを収集することはむずかしい）。

(a) 日系カナダ人日本語変種の形成初期のデータ。本稿で使用した一世のデータ（真壁データ）は、カナダに渡ってからかなりの時間が経過しているものであり、カナダの日本語変種の形成のプロセスがある程度の段階まで進んでしまっているものである（図2のシステム3）。システム1からシステム3にいたる幅広いデータがほしいところである。

(b) 一世の多様なスタイルの日本語会話データ。移民の言語研究においては、コイナーやリングフランカにスポットライトを当てがちであるが、移民一世は母方言やコイナー、移住先の言語などを使用する多言語多変種使用者（渋谷2013）であったはずである。5節の図2のそれぞれのシステム内部にある要素を明らかにするためにも、本稿で分析の対象としたインタビューデータのほかに、同郷人のあいだや、他地方出身者などを行う日常的な会話で使用する日本語変種（vernacular）の実態を多面的に明らかにできるような会話データがほしいところである。その会話データのなかに、相手の使用する、自身のことばとは異なることばへのアコモデーションや、自身のことばの言い直しなどが観察されれば、それぞれの段階のシステムの実態やシステムの形成過程の解明に貢献すると思われる。

(c) 一世の会話の縦断データ。この種のデータがあれば、5節の図2に示したプロセスのなかの、①他の方言形式の、自身の言語知識への取り込みや、②バリエーションの発生、自身の言語知識の再構造化（McLaughlin 1990）、③試行的使用、④使用の自動化（発話開始までにかかる時間、フィ

ラーの不使用などによって推測できる)などを、一部、明らかにすることができるであろう。また、こういった縦断データを多くの話者について集めることができれば、コイナー的な変種が社会的に拡散、定着していくプロセスも明らかにすることができる。

世界的な人の移動が常態化しつつあるいま、過去に行われた移住によって日本語にどのような言語変容が生じたかを振り返ってみることは、社会的に意義のあることであろう。また、言語研究の面でも、日系一世や二世の話す日本語変種の実態とその形成のメカニズムを解明することは、第二言語／方言習得研究(渋谷2016)あるいは接触言語学一般の進展に大きく貢献するものである。

[調査資料]

真壁知子(1983)『写真婚の妻たち—カナダ移民の女性史—』未来社。
村井忠政(2000)『日系カナダ人女性の生活史—南アルバータ日系人社会に生まれて—』明石書店。

[引用文献]

飯野正子(1997)『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会。
佐々木敏二(1992)『日本人カナダ移民史』不二出版。
渋谷勝己(2010)「移民言語研究の潮流—日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて—」『待兼山論叢 文化動態論篇』44: 1-22。
渋谷勝己(2013)「多言語・多変種能力のモデル化試論」片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房、pp.29-51。
渋谷勝己(2014)「接触言語学から構想する方言形成論—ハワイの日系人日本語変種を例にして—」小林隆編『柳田方言学の現代的意義』ひつじ書房、pp.317-340。
渋谷勝己(2016)「第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて—現状と問題点—」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究の新天地を求めて』くろしお出版、pp.269-288。
渋谷勝己・簡月真(2013)『旅するニホンゴ—異言語との出会いが変えたもの—』岩波書店。
新保満(1996)『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史—』御茶の水書房。
半田知雄(1966)『今なお旅路にあり』太陽堂書店。

- 彦坂佳宣 (1994) 「日系カナダ人の日本語 (1) —バンクーバー周辺地域を主として—」
『名古屋・方言研究会会報』11: 1-11.
- 彦坂佳宣 (1995) 「ステイプストン日本語生活誌—カナダ日系移民からの聞き取り—」
『立命館文学』540: 244-258.
- 日比谷潤子 (2000) 「英語からの語彙借用—日系カナダ人一世の事例研究—」『社会言語
科学』3-1: 17-23.
- 日比谷潤子・高木千恵 (2010) 「日系カナダ人の日本語」『日本語学』29-6: 18-27.
- 前山隆編著 (1986) 『ハワイの辛抱人—明治福島移民の個人史—』御茶の水書房.
- 真壁知子 (1983) 『写真婚の妻たち—カナダ移民の女性史—』未来社.
- 村井忠政 (2000) 『日系カナダ人女性の生活史—南アルバータ日系人社会に生まれて—』
明石書店.
- McLaughlin, Barry (1990) Restructuring. *Applied Linguistics* 11: 113-128.
- Mufwene, Salikoko (2001) *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge
University Press.
- Nishimura, Miwa (1995) A functional analysis of Japanese/English code-switching. *Journal
of Pragmatics* 23: 157-181.

(文学研究科教授)

SUMMARY

Canadian Japanese of *Nikkei Issei* and *Nisei*:
Its Linguistic Features and Their Development

Katsumi SHIBUYA

This paper aims to describe the characteristics of the varieties of Japanese spoken by five Japanese first generation immigrants (*Issei*) and one second generation descendant (*Nisei*) and sketch their historical development, using the data collected for the study of the immigrants' life histories. Three linguistic variables (negative suffixes, *onbin* forms (euphony), and aspect markers) are analyzed and the following conclusions have been obtained:

- 1) *Isseis* employ in their conversation with the researcher various forms such as native dialect forms, forms of standard Japanese and non-native dialect forms which have been acquired after their arrival in Canada. Salient dialect forms, however, seem to be avoided because of its non-favorable connotation.
- 2) Our *Nisei* speaker shows the same variability as the *Isseis* do, but the variability is reduced in favor of one of the forms *Isseis* employ, which is not necessarily the one of Standard Japanese.

On the basis of the above findings, a tentative model of the process of the development of Canadian Japanese is presented.